藤屋 侃士
(下松市楠ケ丘)

体験を肯定的に生きる
～新しい人に(5)～

高校時代の恩師から届いた年賀状に「思い出も遥か遠くになりにけり、いつの間にか米寿となり候」とある。確かに六十年余が過ぎ、高校時代は遥か遠い過去になった。しかし、恩師は私の中に今も生き続けている。

と言うのは、大学受験で志望校が不合格になった時のことだ。恩師が「君はコツコツ努力するタイプではないので浪人しても伸びないと思う。先日の文化祭で君が司会をするのを見た。弁護士よりアナウンサーに向いている」と言って一冊の週刊誌を見せられた。そこには来年四月から日大芸術学部に放送学科が新設されるとあった。

伯父が裁判官だったので、勉強もしないのになんとなく弁護士を夢見て中央大学法学部を受験し、不合格となった直後のことである。

恩師の助言に従って受験し、今度は合格。卒業後、アナウンサーとして放送局に入り、結局、六十五歳まで放送人として働いた。

恩師が今も私の中に生き続けているのは、この経緯だけではない。この体験が私に自信をとり戻させ、物事を前向き、肯定的に受け止めることができるようになったことだ。

過去の思い出だけの同窓会ではないように。
しかし友と肩を組み母校の応援歌を歌うも楽しい

小学三年まで優等生だったが、その後、成績は下がり続け、勉強もしなかった。兄はぐれて結核を患う父とよく口論し、家庭は暗く、五年生の時、父は他界。以後、母が働いて育った。そして弁護士の夢も断たれた。

その時、恩師が「私にも良いところがある」と認めてくれた助言は、その後の生き方に大きな影響を与えた。

法学部を目指して同じ夜汽車で上京した友は合格し、在学中に司法試験に合格して今も弁護士として活躍している。恩師のお陰で卑屈にもならず、彼の結婚披露宴、事務所開き、息子の結婚披露宴、金婚式などの司会をさせてもらった。

体験を過去として捨てることなく、自分の意に反することも肯定的に受け止め、交わりと感謝の気持ちを持ち続ける。その中に大小は別として、古い自分から新しい自分に成長する芽が宿っているように思える。それは夫婦としての成長や他人にも力となることもある。

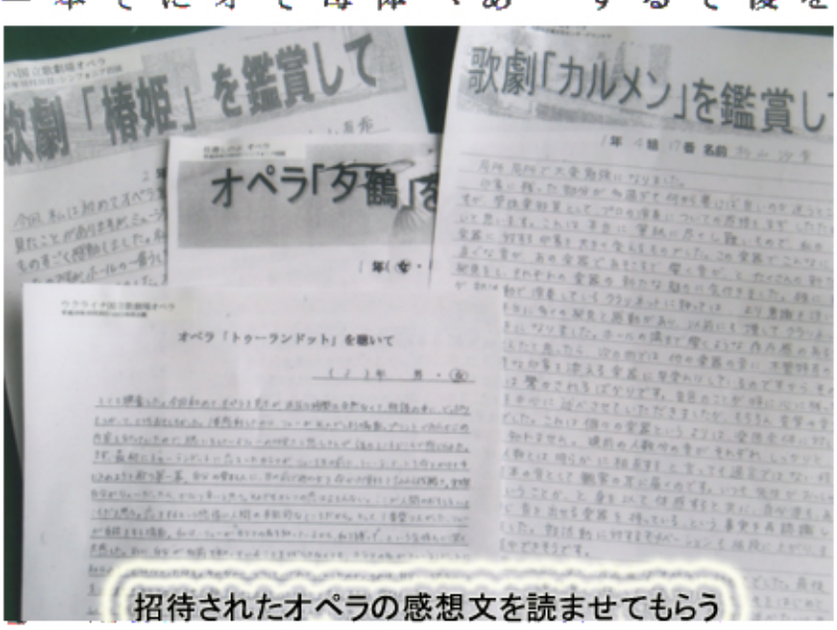
前述の友人が五十歳を過ぎてヨーロッパを旅した時、ウイーンで初めてオペラを見て感激する。「もっと若い時にオペラに親しみを持っていたら…」と後悔したという。そして若い時に本物に接することの大切さを実感する。

高校の同級生でもある奥さんと話し合い、自分たちが若い時、体験しなかった夢を、母校の高校生に体験してもらおうと、彼らをオペラに招待することに実現させているのである。同じ高校で学んだ息子もこの企画を継続するとか…伝統は過去の思い出だけでなく、回に約百三十人)も招待しているのに驚く。

時間と空間を超えて六十年余り前に体験したかったことを後輩で的に持つことの大切さを書いたのは、それが老いても輝いて生きることにオーバーラップしていると思えるからである。

体験を共有することかもしれない。

「新しい人に」シリーズの最後に体験を肯定



招待されたオペラの感想文を読ませてもらう